きょうと福祉倶楽部だより

2010年 第4号 夏

おばあちゃんと暮らして

瀬川　知世

おばあちゃん(94歳)と暮らして三年目になります。
「あんたの信じる神様を信じんわけにいかん。」
と、92歳の時にベッド上で洗礼を受けてくれたのは本当に素晴らしい恵みでした。
この間のおばあちゃんの回復は目覚ましく、環境整備や人との関わりの重要性を再認識するものでした。

うちへ来るまでは長男(74歳)と二人暮らしで福祉サービスに一切関わることなく、日中は一人家にいて話し相手もなく過ごしていました。
栄養状態も悪く、脱水もあり体調が悪く、認知症も進んでいました。
這ってトイレに行こうとしても場所が分からず、目が離せない。
入院してもすぐに退院を迫られ、退院後の福祉サービスの提供には何十人待ちと言われる状況。
長男との二人暮らしは限界でした。

おばあちゃんと暮らし始めた頃

孫の私がおばあちゃんと暮らすことを決め、家探しから始めなければなりませんでした。
主人の理解と協力のおかげで、何とかすぐに家が見つかりました。
引き取ってからはオムツ交換に加え一日に何度もポータブルトイレへの移動がありました。
すでに歩けなくなっているにも関わらず自力でトイレへ行こうとしてベッドから落ちる。ベッドへ上げるのは大変でした。
パーキンソンの薬の副作用で吐き気が止まらなくなり一ヶ月間の絶飲食・入院。
パーキンソンの薬を止めたため猛烈な身体の痛みに襲われるようになり、あらゆる痛み止めも効かず、整形外科の先生に麻薬まで処方されました。

ですがこれも効果はありませんでした。何とか痛みだけは軽くしてあげたいという思いでいっぱいでした。

身体を動かすと痛みがひどく、デイサービスへ行くのも止めるしかありませんでした。痛みのためにオムツの交換も嫌がるようになり、バルーンで導尿するようにしましたが、尿路感染を繰り返し、苦痛は増すばかり…。褥瘡もひどくなり度々入院するほどでした。

受けられるサービスにもかなり限界があり、二歳の娘を抱え私自身も疲れ果てて行きました。

当時、ヘルパーさんも事業所の都合がつく時間にしか来てもらえず、
2時～4時の間に30分でした。訪問看護は断わられました。
ヘルパーさんにしてもらえることは水分補給と見守り程度しかなく、それによって私自身が助かると感じたことはありませんでした。
それでも当時のケアマネさんには、とにかく利用して関係を作り、
おばあちゃんのヘルパーさんをあなたが育てて、と言われました。
私自身10年来のうつ病があり、心身共に折れそうな現実だったと思います。

義母を通してきょうと福祉クラブにお世話になることになり、
大きな転機が訪れました。
おばあちゃんの障害者手帳1級取得から受けられるサービスが広がり、
私自身の負担が軽減されました。
パーキンソンにはパーキンソンの専門医ということで主治医を変わり、
パーキンソンの薬を再開されたことによりあの猛烈な身体の痛みからおばあちゃんが徐々に解放されて行きました。
ヘルパーさんは一日三回、朝・昼・夕食時に一時間ずつ来てもらえるので、
オムツ交換・食事介助も任せています。
訪問看護は週に二回、デイサービスも週に二日行きます。
このことにより摘便・入浴が受けられるようになり、私自身が摘便を施行したり、
ベッド上での清拭・シャンプーをする必要がなくなりました。
鍼灸のリハビリも週に二回あります。

今のおばあちゃん♪

ベッドにリフトも設置され、
移動の重労働からも
解放されました。
リフトでの移動は楽だと
おばあちゃんも言っています。
これらのサービスが整い、
おばあちゃんは見る見る元気になり落ち着きました。
認知症も明らかに良くなりました。
全介助でしか食べられなかったのに、
お箸を使って自力摂取しています。
おしゃべりが大好きなので一日三時間のヘルパーさんとの関わりは、
本当にいいリハビリになっています。

今ではたまの外出と外食を楽しめるまで元気に落ち着いています。
自身の体験から、利用者のニーズに添ったサービスと医療提供、
有効な知恵とその実行があれば、寝たきりであっても元気になれ、自立した生活に向かえるということです。そうすれば家族とも苦しまずに暮らせます。
家族が犠牲になるような家族介護ありきの時代は終わりにしなくては行けないと思います。